

「主体的・対話的で深い学び」を促進するCBIを手法とした英語教育

研究年度 令和5年度

研究期間 令和5年度～令和5年度

研究代表者名 山崎 祐一

共同研究者名

1. はじめに

本研究の主たる目的は、グローバル人材の育成を目的としたCBI (Content-based Instruction)による英語教育の実践が、英語学習者の英語発信力強化や異文化理解を含む実践的な英語コミュニケーション能力の向上にもたらす効果について検証することである。具体的には、語彙の暗記や文法重視で行われている従来の英語教育をCBIの指導法に転換することによって、学習者たちの英語学習に対する意識がどのように変容するかを追究し、その教育の実践が、「主体的・対話的で深い学び」の実現や、学習者の英語による発信力にどのような影響を与えるかを検証する。2020年度より小学校で英語が教科化されたことも踏まえ、新学習指導要領に準拠しながら、コンテンツを重視した指導法が、学習者が英語を言葉として知るだけでなく、異文化に興味を持つことや、目的や場面、状況に応じて、適切、かつ効果的に使えるコミュニケーション能力を身に付けることにつながるかどうかについて探究する。また、フィードバックとして得られる教育実践者の意見や、国内外での事例を参考に、現在の日本の英語教育のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討する。申請者は、地域とリンクした取組の一つとして、2021年度より長崎県佐世保市教育委員会及び佐世保市内の小中高やアメリカンスクールと連携し、英語学習のモチベーションや話す力を向上させるための英語教育を実践している。本稿では、CBIを手法として、小学生を対象とした異文化理解を取り入れながら「話す力」の向上を目的の一つに実践している取組について報告する。

2. 異文化を視野に入れた英語教育

前述のとおり、2020年度より、日本の公立小学校で「外国語（英語）」が教科化された。このことは我が国の英語教育の歴史上、最大の変革と言っても過言ではない。現在、高学年（5～6年生）で週2回（年間70時間）、中学年（3～4年生）で、教科ではないが必修として週1回（年間35時間）の外国語（英語）の授業が実施されている。『小学校学習指導要領（平成29年告示）』（文部科学省、2018）では、外国語科の導入の趣旨として、「グローバル化の急速な進展」が挙げられている。「外国語によるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種だけではなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」と書かれている。これはまさに、子どもたちが将来直面する異文化コミュニケーションの能力の重要性や必要性について述べられている。つまり、国内外を問わず、子どもたちが社会に巣立ったときには、異文化圏の人々と外国語を使ってコミュニケーションをとることが頻繁に起こり得るということである。

ところが、同学習指導要領の外国語科の目標や、文部科学省（2011）が提唱する「グローバル人材の育成」の中に、「言葉の背景にある文化（異文化）の理解」の大切さについて明記されているにもかかわらず、現行の教育実践や教員研修講座等の中で、それらが取り上げられ議論されることは

ほとんどない。表現の機械的練習や形式の暗記に終始している場面が多く、必ずしも子どもたちの英語学習に対する興味や発信力、また、文部科学省が提言する「深い学び」につながっているとは言えない。

英語力を図るために、暗記を中心とした英語学力試験の成績だけにその判断基準を求める傾向にある中、小学校英語教育の実践を通して、小学生が言葉の背景にある文化（異文化）に興味・関心を持つことによって、「英語学習に対するモチベーションがどのように変容するか」を追究し、それが、「英語による主体的な発信力の向上にどのような影響を与えるのか」について検証することが重要である。また、異文化に対する理解を深め、文化における価値観の多様性を認知し容認することが、文部科学省が定義する「グローバル人材の育成」や「深い学び」にどのような効果をもたらすのかについて探究することが求められる。

子どもたちが外国語を学ぶ大きな目的のひとつは、異文化圏の人々と円滑にコミュニケーションを実現するための能力を向上させることである。特に英語は国際語として圧倒的に強い通用力を持つ言語であり、たとえコミュニケーションの相手が英語圏の人ではなくても、共通媒体が英語になる可能性は非常に高いと言える。「言葉」はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たし、頭の中にあるイメージを相手に伝える重要な道具として機能する。世界の人々とやり取りをするために、言葉としての英語を習得することは、子どもたちにとってはとても有益である。しかし、子どもたちが「英語を使って何ができるようになるか」ということを考えたとき、もしそれが異文化圏の人々とのインタラクションを通して、適切、かつ効果的にコミュニケーションを実現するための能力の基礎を培うことであるならば、言葉とともに学習の「内容」を理解し、その背後に見え隠れする社会文化的要素にも目を向けていく必要がある。子どもたちが外国の人々とお互いに意思疎通を図り、その独特のコンテキストの中で、自分とは違う世界や考え方を知り、それらを柔軟に認めながら、適切に目的を達成できるかどうかというところに、外国語学習の本当の楽しさがある。

子どもたちは、語句や表現を覚えて言えるようになっただけでは、その言葉を使う国のことを理解したことにはならないし、その国の人々と円滑にコミュニケーションがとれるようになるとは限らない。例えば、日本語を学ぶ海外の学習者たちが、日本人の心を寛容に認め理解することなしに、日本人と上手くコミュニケーションがとれるとは考えにくい。日本語を流暢に話す日本人同士でも、「この人とは話がかみ合わない」ということがあるのは、お互いに相手の考え方が理解できないから、あるいは認めることができない、または認めようとしていないからではないか。学習の「内容」の中に見出す異質な他者への寛容性がある初めて、ヒトとヒトとの居心地のよいコミュニケーションは成立する。

子どもたちは、異なる言語や文化について知ること、それらに興味・関心を持ち、それをもとに、より多くの情報を得ようと自ら調べたり、さらなる知識を身に付けようとしたりする。また、そうすることで、コミュニケーションの際に相手の持つ文化について冷静、かつ客観的に考え、他者に配慮できる心が育まれる。異なる文化・習慣に対して寛容な姿勢を保持し、それらの暗黙のルールをそれぞれの目的や場面、状況の中で理解していくことが、後の実社会における外国語による円滑なコミュニケーションには必要である。まず「内容」に着目することで、その中に見え隠れする異文化を尊重し、文化の差を優劣視しない文化相対主義(ethnorelativism)が、異文化圏の人たちとの相互作用を通して自分の目的を達成したり、異文化のさまざまな状況の中で適切に行動をとつ

たりする能力に結びついていく。

このグローバル化した時代の中、伝統的な地域社会とは異なる新しいコミュニティは、「地球規模で考える」という生き方を基軸としており、外国人居住者の増加という現実、異文化を背景とする他者との共生・異文化コミュニケーションの成立がコミュニティの重要な指標であることを如実に物語っている。子どもたちは外国語を学ぶと同時に、学習の「内容」に目を向けながら、外国の生活や文化に興味を持ち、諸外国の人々の価値観を認め、協調して生きていこうとする態度を養う努力を怠らないことが重要である。そして、そのことは遠い外国の人たちのことだけでなく、実は、教室で今となり座っている異なる考え方を持つ友だちのことも理解し、認め、お互いに分かりあえる方法であるということに、子どもたち自身が気づくという深い学びにもつながっていく。

3. 日本における英語教育の目標

外国語科の学習指導要領(文科省、2018)には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを目指す」と書かれている。そして、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、どのような視点で物事をとらえ、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考え方を形成し、再構築すること」と解説してある。

また、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことが重要であり、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という「学びに向かう力・人間性等」の涵養に関わる目標として掲げたものであり、「文化に対する理解」やコミュニケーションの相手となる「他者」に対する「配慮」を伴って、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を身に付けることを目標としていることが明記されている。

さらには、外国語の背景にある文化に対する理解が深まることは、その言語を適切に使うことにつながる。また、言語を学ぶことは、その言語を創造し継承してきた文化や、その言語を母語とする人々の考え方を学ぶことでもある。更に、言葉を通じて他者とコミュニケーションを図り伝え合う力を高めることで、積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者と共感するなど互いの存在について理解を深め、尊重しようとする態度につながると考えられる。そして、このことは、言語能力の側面から「学びに向かう力、人間性等」を支えることになる」と説明している。

例えば、小学校外国語活動（中学年）の目標として以下の3つが挙げられている。

目標 (1)

外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

目標 (2)

身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

目標 (3)

外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

これらの3つの目標のうち、(1)と(3)には文化のことが強調されており、目標(3)には、前述の通り「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目的として掲げたものであることが説明してある。

異文化理解は、自分とは異なる文化を知るだけではなく、日常、無意識である自文化の再認識にもつながり、まさに自文化や母語に再会する機会を与えてくれる。言葉の背景にあるものを学べば、表層的な事象だけではなく、深層的な部分に気づき、「深い学び」にもつながる。異文化に興味を持つことが、外国語学習の動機づけにつながることも検証されている（ドラージ土屋、2008；纒坂、2008）。

4. ACTFLが提唱する5C's

アメリカでは、ACTFL (The American Council on the Teaching of Foreign Languages)が、外国語教育基準を策定し、それに準拠する形で教育が行われている。その中で、外国語教育に重要であると思われる以下の5つの要素(5C's)を提唱している。

1. Communication (コミュニケーション)

Communicate in Languages Other than English

2. Cultures (文化)

Gain Knowledge and Understanding of Other Cultures

3. Connections (他教科との関連)

Connect with Other Disciplines and Acquire Information

4. Comparisons (言語と文化の比較)

Develop Insight into the Nature of Language and Culture

5. Communities (地域社会)

Participate in Multilingual Communities at Home and around the World

2つ目の要素に異文化理解のことが記されているが、アメリカにおいても外国語教育で文化を一緒に取り上げることの重要性が謳われている。

5. 教育実践の目的

(1) マインドセット

子どもたちに広い世界を見せることにより、価値観の多様性を知らせ、お互いの違いを知り、認め合う心の大切さに気づかせる。

（2）スキルセット

言葉の背景にある文化に興味・関心を持つことで「深い学び」や英語学習に対する動機付けにつながるとともに、子どもたちが思考を働かせながら主体的に英語を発信する力（話す力）を伸ばす。

平成29年度の「英語教育改善のための英語力調査」によると、日本の中高生の、特に英語を「話す力」のレベルが非常に低いという結果であった。

CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）

中学3年生 A1 レベル以上 ⇒ Speaking 33.1%

高校3年生 A2 レベル以上 ⇒ Speaking 12.9%

（平成29年度「英語教育改善のための英語力調査」より）

A1: A basic ability to communicate and exchange information
in a simple way

A2: An ability to deal with simple, straightforward information
and begin to express oneself in familiar contexts

つまり、知識としての「点」はたくさん持っているが、それがコミュニケーションとしての「面」になっていないことが多い。例えば、「逆上がりはこうやってやる」とカードに書いて覚えるような訓練をして、実際に逆上がりをしたことはないという、実践に欠けた教育になっていないかということである。英語は知っているだけでは役に立たない。英語は覚えてから使うものではなく、使いながら身に付いていくものである。

「知識」と「技能」は「行動」や「表現」の内面にあるものを感じ取り、理解する力と結びつけてはじめて活かされる。座学だけではなく、知識及び技能を活用し、言語活動・インターアクションを通して、コミュニケーションの体験的な活動が必要である。

6. 長崎県佐世保市の概況

長崎県佐世保市は米海軍基地と共存を図っており、約7,300人のアメリカ人が在住している。3校のアメリカンスクール（小学校2校、中高一貫校1校）があり、約800人の児童・生徒たちが外国語としての日本語を学んでいる。英語学習の一環としてこれらのアメリカンスクールと異文化交流を実施している市内の小学校もある。また、同市では2017年に「英語で交わる街佐世保プロジェクト」を立ち上げ、市教育委員会との連携による「英語で話す力」、「異文化理解」をテーマとした小学校英語教育を展開している。



E. J. King Middle/High School



Sasebo Elementary School

7. 実践例

(1) アメリカンスクールとの対面交流学習

アメリカンスクールと市内の小学校の児童がお互いの学校を訪問し、言葉と文化を同時に学ぶ異文化交流を実施している。

(例)

- ・日本の昔遊びやハロウィンのお面作りを通して異文化コミュニケーションを深める。
- ・日米の大切な日として、クリスマスや正月について、英語を使ってお互いの文化を発信する。
- ・日米児童合同で両国のドッジボールのルールの違いについて体験を通して学ぶ。



(2) ICT を活用したオンラインでの交流学習

ここ3年間はコロナ感染症予防のため、アメリカンスクールとの対面での交流は行わず、ICTを活用したオンラインでの交流学習を実施した。

- 自己紹介で、好きな食べ物、教科、スポーツなど、身近で簡単な事柄について、英語で考えや気持ちを伝え合った。
- アメリカ文化に関するクイズや英単語を推測するジェスチャークイズなど、言語と非言語を通じてお互いの文化について学んだ。
- オンラインでの交流学習後、引き続き地域における国際友好関係を維持・発展させるため、日米の児童がお互いの文化を言葉と絵で表現したカードや年賀状、バレンタインカードの交換を行った。



(3) 佐世保市教育委員会との連携

市内の小学校6年生を対象に、「Sasebo グローバルキッズ・チャレンジ事業」で英語ワークショップを実施した。毎回、英語圏文化を画像で紹介し、英語で発問を工夫しながら、児童たちの発話を促した。買い物や注文、ハロウィンなどのテーマではレアリアを用い、児童たちが英語と文化について体験的に理解を深められる教育を実践した。



2023 年度 児童アンケート集計結果

(実施前→実施後)

- | | |
|------------------------------|-----------|
| ① 話したり聞いたりすることが好き(興味) | 7.4 → 9.1 |
| ② きれいな発音で話すことができる(発音) | 4.6 → 7.9 |
| ③ 好きな事やできる事について話せる(対話) | 5.7 → 8.3 |
| ④ 英語の質問に英語で返答できるか(応答) | 5.3 → 8.1 |
| ⑤ 自分の想いを英語で伝えられるか(自己表現) | 5.4 → 8.1 |
| ⑥ 文化やマナーの違いについて知っているか(異文化理解) | 4.3 → 8.4 |
| ⑦ 自分から外国人に話しかけたいか(意欲) | 7.2 → 8.3 |

* 数字は児童の平均

8. 成果と課題

成果

- (1)相手の文化との違いを知ることで、新しい発見から視野が広がり、思考を働かせることで「深い学び」が促された。
- (2)「もっとアメリカンスクールの児童のことを知りたい」、「もっと相手と英語で話せるようになりたい」という「主体的な学び」や学習意欲の向上にもつながった。
- (3)自分の考えや思いを英語で伝える言語活動を通して、「対話的な学び」に発展させることができ、英語で話す自信にもつながった。
- (4)英語や異文化の学習を通して、母語や自文化を再認識できた。
- (5)音声については、英語で話す際に、音の連結や脱落に気を付けて発音することができ、知識・技能を活用しながら、相手との会話をスムーズに行うことができた。